



## 常に新しいことに取り組み続ける音楽家に

大津市で育ったピアニスト久末航さん（24）が2月から3月にかけて留学先のドイツから一時帰国、滋賀、京都、東京などで演奏した。子どもの頃から滋賀でその才能を知られ、ドイツ留学後、2017年に難関のミュンヘン国際音楽コンクールで3位に入賞、活躍の場を大きく広げた。注目の若手にこれまでの歩みとこれからの抱負を聞いた。

### ひさすえ わたる

- 1994年 大津市出身
  - 2007年 滋賀県ピアノコンクール小学校高学年の部第1位・滋賀県議会議長賞
  - 2009年 京都・パロックザールで初のリサイタル、史上最年少で青山音楽賞新人賞
  - 2013年 県立膳所高校卒業、フライブルク音楽大学へ留学
  - 2015年 パリ国立高等音楽舞踊学校に1年間の交換留学
  - 2017年 同大学を最優秀で卒業。ミュンヘン国際音楽コンクール第3位
- 現在、ベルリン芸術大学大学院に在学中  
バイエルン放送交響楽団、シュトゥットガルト室内管弦楽団、日本センチュリー交響楽団など数々のオーケストラと共演  
これまでに村上久仁子、田隈靖子、G・ミショリ、P・ドヴァイヨン、K・ヘルヴェヒの各氏に師事

久末航  
ピアニスト  
久末航さん

聞き手・佐藤 千晴  
写真・中村 憲一



小学6年生で大ホールデビュー!!びわ湖ホール提供

—2月10日、びわ湖ホールの「華麗なるオーケストラの世界」にソリストとして登場されました。

ミュンヘンコンクールのファイナル(本選)でも弾いたチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を演奏しました。阪哲郎さんの指揮が素晴らしくて、とても弾きやすかったです。客席から応援の熱さを感じました。故郷はありがたいですね。

—オーケストラと初めて共演したのもびわ湖ホールだったそうですね

2007年3月、小学6年生の時です。様々な楽器の子どもたちがオーディションで選ばれ、京都市交響楽団のメンバーと共演する企画でした。初代芸術監督・若杉弘さんの指揮でサン・サーンスの「動物の謝肉祭」を演奏しました。あんな大きなホールも初めてでした。本番まで子どもたちが集まったの練習が毎週のようにあり、それもすごく楽しかったです。

—ピアノを始めたきっかけは?

おもちゃのピアノや電子ピアノが遊び道具で、自由気ままに鳴らしていましたが、モーツアルトの「トルコ行進曲」が大好きになって、自分でも弾いてみたくなって。5歳から近所の先生に付きましました。

—どんな子ども時代でしたか?

とてもわんぱくで、幼稚園では問題児。階段の手すりに落書きしたり、本の表紙をさみで短冊状に切り裂いたり。ピアノを習い始めるとあふれるエネルギーがピアノに向かったのか、いたずらは減りました。

おもちゃのピアノにはボタンを押すといろいろなメロディーが聞ける機能があり、気に入った曲があると誰かに聞かせたくて、自転車で近所の家を回り、ピンポンして、インターホン越しに流していました。変な子ですよね。みなさん、「またわーくんが来た」と笑って見守ってくれました。

—初めて見る楽譜でもすいすい弾ける驚異的な才能だったそうですね。小さい頃からプロのピアニストを目指していたのですか?

小学6年生まで通った和邇の辰巳美行(みゆき)先生と晴生先生夫妻の音楽教室では好きな曲をのびのび、楽しく弾かせてもらいました。練習嫌いでしたが、両親から「練習しなさい」とうるさく言われたこともありません。今も音楽を純粹に好きでいられるのはこの環境のおかげだったと感謝しています。

6年生の夏から石山の村上久仁子先生に師事してコンクールやオーディションもいろいろ受けましたが、高校時代はピアノより



学業に力を入れ、将来は理系の研究者になりたいと思っていました。

—なにへ転じてドイツの音楽大学に進まれたのは？

物理や化学が好きで理学部を目指し、第一志望校だけ受験したのですが、うまくいかなかった。そんな時にフライブルク音楽大学のギレアド・ミシヨリ教授から「ワタル、元気が？ 日本に来ていいるから久しぶりに会おう」と電話をいただいたのです。中学生の時に大阪で公開レッスンを受けて以来、5年ぶりの再会でした。近況を報告すると「フライブルクに来なさい。できるだけ早いほうがいい」と熱心に誘っていただき、音大受験の準備を始めました。ドイツ語を一から勉強し、音楽理論を改めて学び、人生が180度変わったぐらいの勢いで！ 4ヶ月後に満点で合格できました。

—2007年にミュンヘン国際音楽コンクールで3位に入賞、活躍の場が広がりました。

ドイツで音楽を勉強している誰もが目指す最高峰のコンクールです。それまでにいくつか国際コンクールは経験しましたが、最も難しく、期間も長いので集中力を保つのが大変でした。

入賞がきっかけとなって2018年には

東京の紀尾井ホールが新進演奏家にリサイタルの機会を提供する「明日への扉」に起用され、このリサイタルを評価していただいて今年「シャネル・ピグマリオン・デイズ」のアーティストに選ばれました。高級ブランド「シャネル」の銀座ビルにあるホールで年間6回の演奏会を開きます。

—バッハから現代作品まで演奏されていますが、好きな作曲家は？

その質問にはいつも困ります。時代も国も様々な作曲家を組み合わせてプログラムを構成するのが好きなので。

ヨーロッパに行つて、日本人なのにいかに自国の作曲家を知らないか痛感しました。日本の作曲家をもっと勉強することが当面の目標です。

—ドイツでの生活はいかがですか？

ドイツの気質も文化も自分に合っています。ドイツの人は頑固だけれど真面目で純朴で信頼できる。フライブルク在学中に交換留学でパリにも1年暮らしましたが、パリの人は洒脱で矜持があつてちょっと斜に構えている。独仏の違いがはっきり見えました。

いま暮らしているベルリンは文化があふれた街です。オペラ劇場が三つあり、ベルリ



ン・フィルの本拠フィルハーモニーを始め大小様々なホールがあり、美術館も多いし、国際映画祭もある。文化が生活に身近で、みんなジーンズなどの気楽な服装で出かけ、心から楽しんでいきます。どんな小さなコンサートにも不思議なぐらい人が入っているんですよ。世界中から音楽家が集まるので競争も激しい。僕は1日に十何時間もピアノに張り付いていられるタイプではないので、気分転換には近くの湖を自転車で一周したり、ボルダリングに挑戦したり。琵琶湖の近くで育ったので、どこに行っても湖を見るとほっとします。

——これからどんなピアニストを目指していますか？

僕の原点は、自分が惚れ込んだ音楽をたくさんの人と分かち合いたいという強い気持ちです。コンサートでもコンクールでも、聴いてもらうことだけに集中してピアノに向かいます。

常に新しいことに取り組み続ける音楽家でありたい。そのために、様々な経験を積んで自分を豊かにしたい。いろいろな人とふれあつて、もまれて……成長するにはそれしかないと思っています。

信じられないぐらいいろいろな人に支えられ、ご縁が重なって今の僕があります。感謝という言葉を大切に歩んでいきます。